

『みがきあっこ』

伊達巻チカ

5,025 字

○あらすじ

長年『みがきあっこ』競技で良好な関係を保ってきた2つの王国は、初めて断絶の危機に直面する。平和を愛する若きハート王子は、ほんとうに磨きあうべきものは他にあったのだ、と『みがきあっこ』に先人たちが込めていた真の意味に気づき、両国の未来のために立ち上がる……。

ある島を二分する2つの王国の間で、長年行われてきた競技が『みがきあっこ』です。制限時間内に、それぞれが相手から出題された物を徹底的に磨き、そのきれいな仕上がりを競うのです。例えば、金時計 VS 手鏡、ディナー皿 VS アルミの弁当箱、カップ VS 泡立て器。このような対戦になるので、競技結果もおよそ引き分けが多く、両国の友好のしるしといえるほどのチックな催しなのでした。各々の王国には慣習や文化がそれぞれにありました。『握力国』は、なんでも手のちからで解決しようと考えます。『脚力国』は、なんでも足の力で解決しようと考えます。似たり寄ったりにも見えますが、2つの国は大真面目に「手がいちばんだ」「足がいちばんだ」と主張を譲りませんでした。傍目にはバカバカしくも、手か足かでエスカレートする衝突を回避し、『みがきあっこ』が平穏無事な競技イベントとして続いてきたのは、各王国の王様がそれなりに利口だったからともいえます。

「足がいちばんだと思って暮らしてきた民の気持ちもわかってやらねば」

「手がいちばんだと思って暮らしてきた民の気持ちもわかってやらねば」

どちらの王様も、ほとんど同じようなことを公言し、犬同士のじゃれあいのように『みがきあっこ』を楽しまれてもいました。

ところがあるとき、『握力国』でクーデターが起きました。温厚な王様が暗殺され、影の王と噂されていた弟君が王様となったのです。強行な弟王は、亡くなった兄の温和施策を苦々しく思っていました。王位について弟は『脚力国』との国交について、さっそくに改革しようと考えました。

「足がいちばん、などなんと嘆かわしいことだ。足は汚れた大地も、泥だらけの山にも分け入るではないか。足がいちばんだとはこの王が認めない。手がいちばんなのだとあいつらには思い知らせてやるのだ！！」

こんなことを言い出したので、『握力国』内は大騒ぎになりました。

「このままでは『みがきあっこ』がほんとうの闘いの場になってしまう。なんとかしなければ、平和が保てなくなるぞ」

侍従たちは思案して、友好のための大使を『脚力国』に派遣することにしました。先の王様の息子で14歳になったばかりのハート王子です。ハート王子は亡くなった王の3番目の妃が産んだ子どもで、実は王様が『脚力国』まで狩りに出かけたときに見初めた花屋の娘でした。『握力国』の王だけに手が早いものだわ、と『脚力国』では噂となりましたが、温厚な『脚力国』の王様は「我々の町の娘の美しさを見逃さないとは、あちらの王も目が高いということよ。節穴ではなかったわ」と楽しそうに笑ったといひます。

『脚力国』縁の王子を派遣して、弟王の企てを先に明かし、挑発にのらないように貴国にお願いしよう、と『握力国』侍従たちは考えました。ハート王子は『みがきあっこ』を小さい頃からよく見ている、手で磨こうが、足で磨こうが、どちらでもいいのに、といつも思っていました。足を器用に使ってなんでもきれいにしてしまう『脚力国』の民も素晴らしいと思っていたのです。

境界門を越えてハート王子が『脚力国』に入ると、あちこちから足踏みの音が響いてきました。

「ハート王子さま、これは歓迎の足踏みでございましょう」

おつきの侍従が言いました。見ると、小高い山々に『脚力国』の楽隊たちが並んでいました。

「固い岩盤の上をよくリズムよく踏めるものだね」

これは、私たちがいうところのタップダンスのようなものでしょう。ハート王子には初めて聴くものでした。

『脚力国』の王様のお城に着くと、さらに王子の驚く光景が待っていました。城の侍従たちがス〜〜イス〜〜イと床を滑って移動していたからです。

「ハート王子、ピカピカに磨かれたわが城の床をご覧ください。たいへん気持ちいいのですよ。特別なワックスで仕上げた床の滑り具合もお試しく下さい。脚力国特製の横滑りズックを履いていただければその性能がおわかりいただけるでしょう」

うながされて、ハート王子もさっそく試してみました。すると、広い大広間をス〜〜イス〜〜イと高速で滑ることができ、とても心地良いのです。

「速いぞ〜実に速いな〜これはいい！！」

王子はさっそくに『握力国』でも取り入れたいと言いました。すると、

「ハート王子！」

メガネをかけて、分厚い本を片手に持った『脚力国』の次官が王子のところに駆け寄りました。

「失礼ですが、当横滑りズックはワックスをかけたピカピカの床でないと効力は活かせません」

次官は、特製の横滑りズックの開発者でした。

「私は幾度か貴国を訪問させていただいておりますが、貴国の床はまことに・・・えっへん、まことに・・・」

「それ以上は言わなくともわかります。わが握力国は、手が触れるところだけを磨くこと

が習いの国です。壁、窓はいつもピカピカですが、床は磨いていません。たとえ特製ズックを履いたとしても滑りはしないでしょう」

ハート王子は悲しそうに言うと、『脚力国』のお城の窓を眺めました。床とは反対に、お城の窓は汚れて外が見えませんでした。

「不思議なものですね。わたしたちはなぜか真反対なことをしているような気がします。こちらでは窓の向こうが曇って見えないのですから・・・」

王子がそう言うと、『脚力国』の次官が嘆息をつきました。

「わが脚力国では、窓や壁こそが二の次なのです。足でまかなう動きでは壁や窓には限界があり、ガラス拭きと壁そうじに難渋しております」

ハート王子と次官は暗い面持ちで腕組みをしました。しばらく沈黙が続いた後に、雷に打たれたようになって、

「みがきあっこ！！」

王子と次官は手をとりあって叫びました。

「それぞれのお城を、みがきあっこ競技で磨きあうべきです！！」

これは歴史的な大転換、エポックメイキングになると評判になりました。『握力国』の選手は『脚力国』のお城の窓と壁を、『脚力国』の選手は『握力国』のお城の床を、磨いてピカピカにすれば一石二鳥で大成功！とハート王子も次官も思いついたのでした。『みがきあっこ』の主旨変更に対抗すると思われた、『握力国』の弟王はハート王子の進言を受け入れ、「実に頼もしい提案をしてくれた」と喜びました。こうして、いつものように『みがきあっこ』が開催される季節を迎えることになりました。

異変は『みがきあっこ』の終盤に起こりました。『握力国』の選手たちは窓と壁をきれいに磨き終わると、窓を閉め、扉を閉め、『脚力国』のお城で暮らす人たちを追い払ってしまったのです。知らせを聞いて驚いたのはハート王子でした。

「城をのっつれ、などと王が命令したというのか。ルール違反だぞ！」

怒った王子はすぐに弟王の居へ急ぎましたが、すでに弟王は『脚力国』のお城を奪いとりとうと家来を引き連れて出発していました。

「ああ、わたしはなんて愚かだったのだ。弟王があれほど喜び、変更をあっさり認めた理由をもっと深く考えるべきだった。私も次官も侍従も誰もが浅はかだった。そうだ・・・わたしは磨くところを間違えていた・・・」

ハート王子はなんとしても『脚力国』を守ろうと、全速力で弟王を追いかけました。『脚力国』のお城の大広間にハート王子が駆け込むと、弟王がお城のてっぺんから『脚力

国』の王様を吊るし、そのロープをまさに切ろうとするところでした。お城の窓はきれいになって透明になっていましたから、ハート王子にはすぐに王様の苦しそうな様子が見えたのです。

「今、このハートがお助けいたします！」

ハート王子は窓から身を乗り出して『脚力国』の王様を両腕でがっちり引き寄せ、持っていた剣でロープを切って王様を助けました。足は太くても手や腕は枯れ木のように細い『脚力国』の家来たちはそれを見て泣いて喜びました。もう一步のところ、お城をのっとれると思っていた弟王は怒りました。

「ハート王子！ お前は今、なにをしたのかわかっておろうな！！」

「はい。わが王国の剣はもう少しで錆びてしまうところでした。私の心は朽ちてはいません。私の心は正しく動き、貴国の王をお助けすることができました」

ハート王子は大広間に進み出ると、弟王を睨んで言いました。

「この場に参集するすべての者に告げる！ 現『握力国』王の心を磨き、澄んだ心根にできるものはおらぬか。これこそ、史上最大のみがきあいであろう！ 王の心を磨けた者には褒美とともに、わが臣下になることを命ずる。両国の者で我こそはと思う者は遠慮せず出られよ、出られよ！」

大広間に集まった人々は顔を見合わせました。歴代の『みがきあいっこ』でも、このような難題は出たことはありません。

「ハート王子、残念だが思いつきだけでは治世はつとまらないのだ。誰も手をあげないではないか、わしの勝ちだな」

弟王がニヤリと笑って言いました。そのとき、

「お待ちください！」

いちばん後列に控えていた長いマントを着たひとりの若者が前に出てきました。

「私が、御心を磨かせていただきます」

若者はハート王子にあいさつをすると、弟王の前に進み出ました。

「王様、この城には心の綺麗な王様を、城自らが王位にとどめるという言い伝えが昔からありますことをご存知でしょうか。心を磨くとは、つまり城の声を聴くことに他ありません。さあ、王様、この靴を履いてお立ちください。立ち上がり中央のベランダに向かって歩いてみてください。王様がこの城にふさわしいお方であれば、必ずやその両足を城自らが引き止めます」

弟王は、若者がひざまずいて足元に置いた美しい靴を履くと、

「わしを騙すつもりだろう。こんな靴だけで手にはのらんぞ。小賢しい奴め」

と言いました。

「それでは、まず・・・私自身がお仕えする者としてふさわしいかどうかを、城に訊いてみることにいたしましょう」

若者は広間の中央に立つと、

「わが心を磨き給え！」

と叫び、歩き出しました。若者は少しだけ床を滑るように進んだかと思うと、ベランダの手前でぴたりと止まってしまいました。若者が歩いた軌跡は、ダイヤのようにキラキラと光って見えました。「おお～」と歓声が湧き上がります。弟王は「バカバカしいパフォーマンスだが、わしが王だと見せつけてやろう」と立ち上がりました。歓声がひととき大きくなりました。

「わしこそが王の中の王なのだぞ！」

歩き出した弟王の背中を、若者がトン！と押しました。すると、弟王はピュ～～とベランダまで滑っていき、開け放った窓を越え、柵を越え、その先まで滑っていき、やがて飛ぶようにして姿は見えなくなってしまいました。

若者はハート王子に両手を差し出して言いました。

「私は、貴国の王様の悪い噂を聞き、もしやと思い、広間の中央部分だけを通常の3倍は滑りやすく磨いておくように命じておりました。弟王様にご用意したのは当国の特製滑りズックを強化した特別なものです。私が履いております靴は貴国の侍従さまにお借りした靴でございました」

頭を下げる若者にハート王子が言いました。

「この城はまことに賢い。そして、きれいな城である」

若者が驚いていると、ハート王子は若者の手を握って言いました。

「そなたは賢者だ。私たちはそれぞれが手と足をいちばんに磨いてきたつもりだが、知力こそ磨かねばならないものだった。そして、心も常に磨かねばならない。曇ってしまったのは失格なのだ。賢者よ、そなたはどちらも美しい」

キュキュ、キュッキュキュ、キュキュ、キュッキュキュ。

美しい音色が城内に聞こえてきました。お城の窓を磨く侍従たちの動きに合わせて、ガラスがきれいな音を奏でていたのです。『脚力国』の者たちも手を存分に使っていました。『脚力国』のタップダンスの真似をして、『握力国』の者たちも床を滑ったり、リズムに合わせて足を動かしています。まるでジャズミュージックのような、掛け合いによる新しい『みがきあっこ』が始まっていた。命が助かった『脚力国』の王様がハート王子のもとにやって来ました。

「ハート王子、東に見える我が国の小高い山の名前をご存知ですか。あの山は、アクリ
ョク二十三世山、亡くなった先の貴国王の御名前を付けております。これまでは窓が
曇っていて見えませんでした、これからは毎朝、私は先の王の面影を思い、手を合
わせることにいたします」

「ありがとうございます、王様。今のこの気持ちを、私もしっかりと胸に刻んでまいりま
す」

互いを磨きあった心から、ひとつの感動が生まれた瞬間でした。(了)